松江市史講座　　2019年6月15日

昭和恐慌と畜産業の展開－「米と繭」から「有畜農業」へ－

島根大学法文学部　板垣 貴志

島根大学法文学部ＨＰ

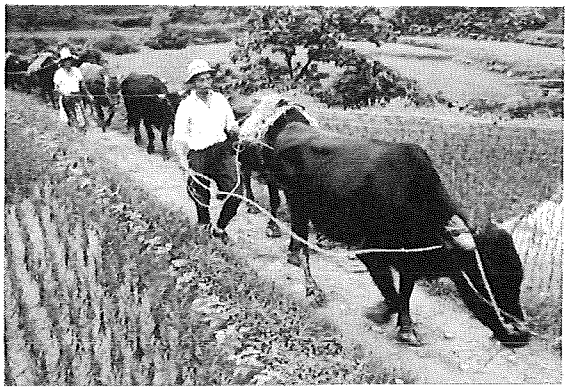
大学で歴史を学ぶということは、たんなる趣味的道楽の追求ではありません。研究対象はなんであろうとも、時代と社会の深部を捉えることで、無関係に思える事物とのつながりが発見され、対話の可能性が飛躍的に広がります。現代社会に歴史的な知見をどのように活かすのか、一緒に追求してみませんか。

中国山地をフィールドに、家畜を通して見えてくる日本の近現代社会を研究してきました。地域に残されてきた歴史資料に無限の可能性を感じています。それらを活かした実践的な近現代史研究の構築を目指しています。

役牛とはどのような牛なのか？　／　放牧の重要性　／　蔓牛（つるうし）
中国山地の巨大牛馬市　／　たたら製鉄と牛馬　／　牛馬の飼養総頭数とその推移
1930年代後半以降の展開　昭和恐慌と畜産業の展開　／　牛の預託慣行
牛を介したインフォーマルな社会保障制度　／　有畜農業期（1930年代～60年代）研究の可能性

拙著『牛と農村の近代史－家畜預託慣行の研究－』思文閣出版、2013年12月

序　章　課題と視角
第一章　家畜小作概念の再検討
第二章　牛生産地域における家畜所有の歴史的展開
第三章　中国山地における蔓牛造成の社会経済的要因
第四章　中国山地における役牛の売買流通過程と牛馬商
第五章　鞍下牛慣行による役牛の循環と地域社会
第六章　中国山地の預け牛関係にみる信頼・保険・金融
終　章　家畜預託慣行の盛衰と近代日本農村
附　論　板垣家文書の史料群構造
聞き書きノート



〈里での使役を終えて山へ帰る鞍下牛の隊列〉
1955年頃に島根県旧能義郡伯太町にて長尾努氏が撮影した貴重な記録写真。戦後にも小規模な鞍下牛慣行は残存していた。

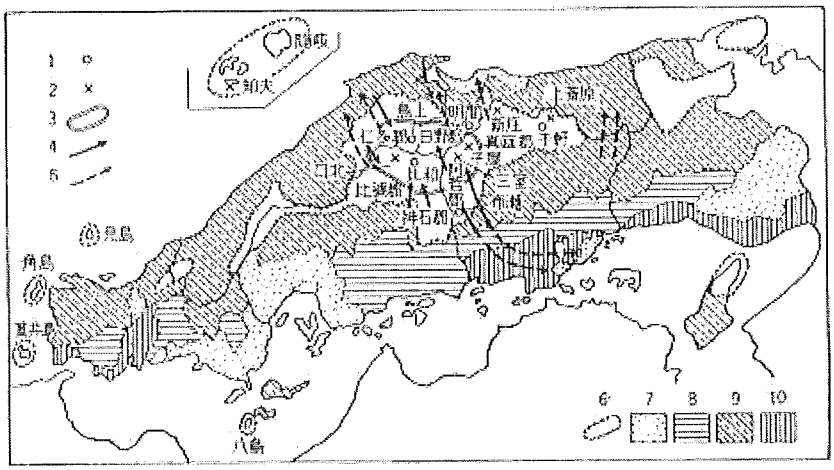
家畜預託慣行　＝　家畜を預託・賃貸借・共有する行為の総称
　　⇒　家畜を介して形成される人々の社会関係に着目

鞍下牛（使役用牛）と預け牛（牛購入資本）が有機的に関連しながら広域的に循環するシステムを実証
山地中腹部などの周辺地域から牛購入資本が投下（預け牛）されることで山地奥部では多頭飼育および優良牛生産が展開し、そこで育成された優良な使役用牛（鞍下牛）の循環は、牛を所有できない零細農民の営農や生存を保障する意味を持った。それは、資本主義化のなかで急激に疲弊した地域社会に形成された新たな《相互扶助ネットワーク》といえる。（拙著184頁）

役牛馬の生産地　山間部や島嶼
古くから生産地と使役消費地との地域的分化が進行→　広域に及ぶ遠隔地取引

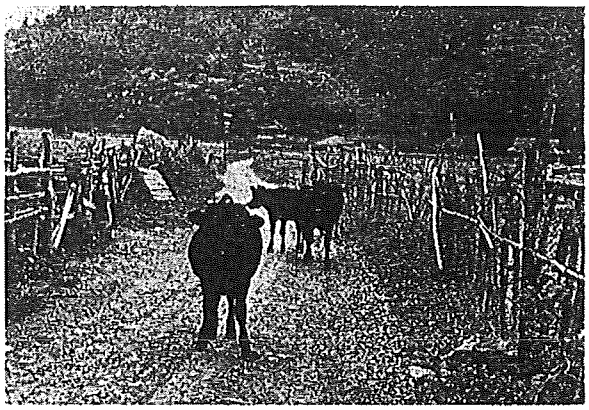
巨大産地　北上山地、阿武隈山地を中心とする東北馬産地
　　信濃の木曽馬で知られる中部馬産地
　　但馬を含む中国山地の牛馬産地
　　および九州の牛馬産地
　→　畿内に隣接していた中国山地は、役牛馬の商品化が前近代より進展し、それを象徴するように、大山・久井・出羽といった巨大牛馬市が集中していた。

図１　中国地方畜産地帯図

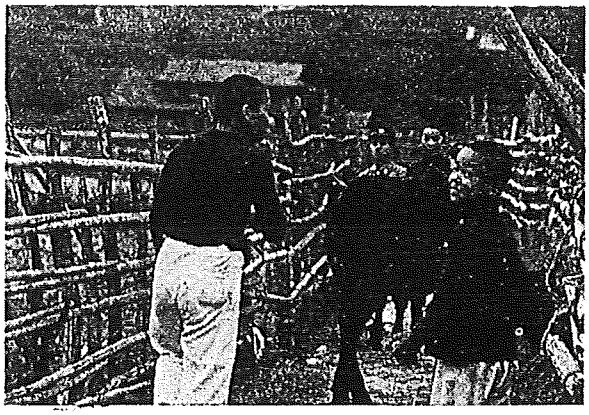


1　柵に囲われた集落
2　刈跡放牧　3　一番鞍下牛借入地
4　一番鞍の移動　5　二番鞍の移動
6　放牧生産核心地　7　肥育地帯
8　育成地帯　9　舎飼生産地帯
10　使役肥育地帯
注）石田寛「農業地域における牧畜」『生態地理学』1961、第12図より

畜産からみた中国山地（但馬地域を含む）

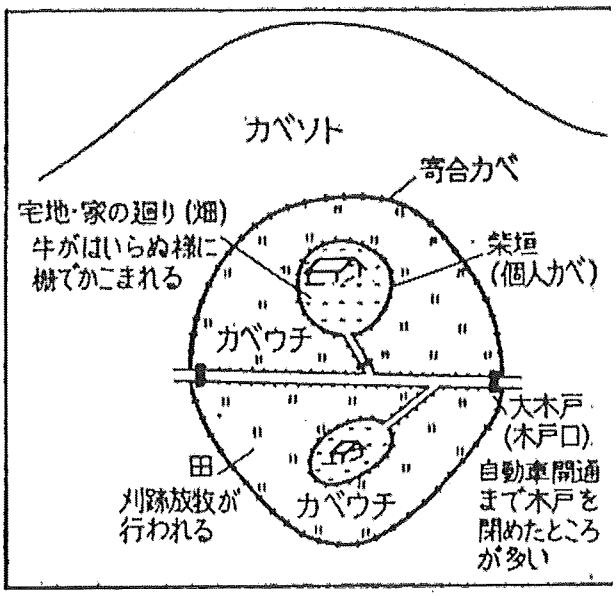


第16図　道路にあそぶ牛，向うに見えるは代城



第17図　かべに狭められた道で牛とあそぶ子供たち

『陰陽八郡郡勢一班』大正６年（1917）
鳥取県　日野郡　西伯郡　東伯郡　／　岡山県　真庭郡　阿哲郡
広島県　比婆郡　／　島根県　仁多郡　能義郡



蔓牛（つるうし）　周助蔓 熱田蔓など

（榎勇『但馬牛のいま―全国の黒毛和牛を変えた名牛―』彩流社、2008）

メンデルの法則が発表　1865 年

中国山地での蔓牛造成開始　安永期（1772―81 年）

家畜改良学のパイオニア　羽部義孝

1933 年 7 月 15 日～30 日　中国山脈縦断和牛調査団による実地踏査

→　理論より農民達の実践が先行

放牧の重要性

上坂章次『和牛飼育精節』（朝倉書店、一九四二年）

『和牛飼育精節』によれば、放牧による効果は次の六点である。

【一】　筋骨の鍛錬体躯の緊実強化（山野を歩きまわることで蹄は硬く体格は頑健になる）、

【二】　肢蹄の強化、

【三】　持久力の増大、

【四】　飼育利用性の増加（粗食に耐えるようになる）、

【五】　性質の温順化（風雨を凌いだり、群れの中で揉まれることにより性格温順となる）、

【六】　労力の節減。

牛の預託慣行

／　大牛持（おおうしもち）　牛親方（うしおやかた）　牛＝農宝　米 10 俵（600 kg）と同価格

資金に余裕のない零細農民は、自分で牛を購入することができなかった。

1880 年代の松方デフレ期に飛躍的に拡大　→　1930 年代後半から急速に衰退

役肉牛の持つ様々な活用手段　耕耘手段　運搬手段　厩肥生産手段　→　農業に不可欠

蓄財手段　金融手段　→　家畜は富として側面をもつ

家畜預託慣行は資本主義化の圧倒的な波力を緩衝する地域社会の防波堤　＝　歴史的意義

「日本近現代の有畜農業期に関する基礎的研究」科学研究費補助金（2017 年度－2020 年度）

有畜農業とは、耕種農業と畜産との有機的連環を主眼とした自給的性格の強い農法である。１９３０年代から６０年代の約４０年の間に、昭和農村恐慌に対する有効性の期待できる農法として国を挙げて奨励されはじめ、戦後の高度経済成長期に進展した農業機械化までの日本農政の基調であった。現代日本の畜産が、輸入飼料依存体質に起因する食糧自給率の低下や畜産経営の脆弱化、家畜ふん尿による汚染の深刻化などの大きな問題を抱えるなか、かつての有畜農業は、〈土－草－牛の資源循環型農業〉として放牧慣行とともに再評価されつつある。本研究の目的は、有畜農業期を実証的かつ総合的に把握し、この農法を美化することなく歴史学的性格規定を明確することで畜産史と環境史とを架橋し、社会的需要が高まっている資源循環型農業を展望する。